人文科学とコンピュータ　6－1
（1990．9．14）

民俗資料データベース化の試み
－年中行事資料を中心として－

松本浩一*　古家信平**

*図書館情報大学　**東海大学

人文科学研究に必要な資料は、分野によってその形態、性格、処理方法を異にするため、それらのデータベース化にあたっては、個々に問題点を検討しながら、ふさわしい方法を探っていく必要がある。ここでは民俗資料、特に年中行事資料のデータベース化を例に、民俗学研究上重要視される民俗語彙の検索上の問題点とシソーラス作成の必要性、調査報告書の記述の多様性等を論じ、人文科学研究者自身がデータベース作成に向けて、様々な試みを行うべきことを述べる。

DATABASES FOR THE ETHNOGRAPHIC MATERIALS

Koichi Matsumoto* Shinpei Furuie**

*University of Library and Infomation Science　**Tokai University

The materials used in each research field of the humanities have very different forms and characteristics, and we have to employ various kinds of methods of analysis. So when we build databases for the materials, we should investigate suitable methods for each field. In this paper we discuss some problems related to the formation of databases for the materials of Japanese annual customs, such as the nessecity for making a thesaurus of folk terms, the diversity of the contents of research reports which describe various rituals, etc.

はじめに

従来人文系の学術研究におけるコンピュータ利用は、かなり狭い範囲に限られていたが、最近のパソコンと、日本語ワープロやデータベースソフト等のパソコン用ソフトウエアの普及によって、そのような事態は一変され、個々の研究を進める上でも、様々な方面に利用されるようになってきたように見える。人文系の研究では、研究資料の収集、蓄積、処理があくまで個人ベースで進められることが多いため、大型コンピュータ中心のシステムはいまひとつなじみにくいものであった。その点でもパソコンという道具は、人文系研究者にとってより適したものであったのかもしれない。しかしこの道具は決してあらゆる分野で充分に活用されているとはいえない。確かにある分野では研究に直接かかわる処理・分析に応用することまで行われているが、多くのところではカード代わりに資料やその抄録等を入力しておいて、論文を書く時などに必要なところを検索して利用するといった使い方が主なのではなかろうか。人文系の研究の場合研究に必要な資料の形態、性格およびその処理方法は分野によって様々である。そのためそれら資料のデータベース化や、その処理へコンピュータを利用するにあたっては、それぞれの分野の要求にあわせて、個々にふさわしい方法を検討し、可能性を追求していく必要がある。ここでは民俗調査報告書に記載された民俗資料、特に年中行事に関する資料のデータベース化にあたって直面した問題点に考察を加えながら、この問題を考えていくことにしたい。

1．民俗学におけるコンピュータ利用と年中行事データベース

民俗学の隣接分野たる民族学においては、民族学博物館などが、早くから画像情報の処理などを含む先端的な技術を駆使した研究支援システムの構築に努力してきており、これらのシステムは民俗学研究にとっても無関係なものではない。しかし実際の研究の場における研究者個人のコンピュータ利用という点からいえば、それほど積極的にとりくまれているようには思えない。その理由の一つには、民俗学で扱う民俗資料の独自さがあげられよう。従来人文系の分野のコンピュータ利用ということで主としてとりあげられて検討が重ねられてきた、文献資料を対象とした処理方法は、フィールド調査によって得られた様々な性格の資料の処理には、応用がしにくいという事情があったのではないかと思われる。

現在民俗学の調査報告書は一年間に無数といってよいほど出版されており、その資料の蓄積は膨大なものになっている。これらの報告書に関する書誌データベースはすでに歴史民俗博物館で開発され、利用に供されているが[1)]、その報告書に記録された民俗資料のデータベース化はほとんど試みられておらず、研究者個人が民俗資料の収集、蓄積あるいはその分析にパソコンを利用し、研究に役立てているという例もあまり見られないようである。

実際報告書に記録された民俗資料の内容は多岐にわたり、民俗学における個々の分野、たとえば社会伝承、信仰伝承、あるいは口承文芸などにあっては、その資料の性格も、また研究のために必要な処理の方法も様々である。このような民俗資料のデータベース化にあたって、まず年中行事資料にとりくんだのは、一つにはそれがフィールドにあって民俗調査や研究をすすめるにあたって、最も基本になるデータの一つであること、また一つに

はデータの形式が比較的一定しているために、項目が決めやすくデータベース化に適していたためである。そして昨年度の卒業研究として鈴木美香氏がこの課題にとりくみ、ＤＢソフトとして「桐」を使用し、ＰＣ９８０１シリーズの上に、朝日村高根地区、袖ヶ浦町昭和地区についての二つの年中行事情報ファイルと、同地区の生業等の情報を収めた五つの周辺ファイルからなる年中行事データベースを作成した。朝日村高根地区の報告書を選んだのは、その行事に関する記述内容が比較的豊富であったことと、個々の行事を、日付、行事単位、主要参加者、関連場所等の項目によって表化したものが示されており、これをデータ形式の決定に利用できると考えたためである[2)]。そしてこれに加えて相互の比較や参照の例を検討するために、古家が加わっていた袖ヶ浦町の調査報告書をとりあげた[3)]。

このデータベースの中心となる年中行事情報ファイルは次のような項目から成っている。

・レコード番号
・時期項目（大正月、小正月等の区分）
・要素（行事のもつ性格による分類とでもいうべきもの）
・見出し語（報告書に記された個々の行事を示す見出し語）
・見出し語読み
・一般名称（見出し語に対応する一般名称）
・一般名称読み
・月日
・主催者、参加者
・道具、供物
・関連場所
・内容
・いわれおよび補足
・関連行事
・メモ欄

そしてデータベースの作成の過程で大きな問題点となり、課題としてあとに残されたのは次の二点であった。すなわち一つは検索のキーとなる民俗語彙の整理、統制という問題であり、一つは報告書の記述の多様性、あいまいさをどう処理するかという問題であった。民俗語彙の問題は民俗学はその草創期から重視してきたことであり、この問題は特に大きな意味をもっていると思われる。以下にこの二つの問題点について詳しく述べてみたい。

２．民俗語彙の整理

先にとりあげた二つの報告書についてみてみると、朝日村高根地区のものは、「生活と文化」という項目の第一番目として「（１）年中行事、農耕儀礼」という項目が立てられており、その中はまず簡単な概説があったあと、「ア　正月の準備」、「イ　大正月の行事」、「ウ　小正月の行事」、「エ　春から夏の行事」、「オ　盆の行事」、「カ　秋から冬の行事」、「キ　農耕儀礼」という区分になっている。これらの項目は年中行事の大分類ともいえるものであり、次にこれらのもとに日付を記して個々の行事を示す見出しが並べられ、そのもとに具体的な記述がなされている。このデータベースでは、この見出し

語によってみちびかれる記述の単位を一つのレコードとすることにしたので、見出し語はいわばタイトルと同様の意味をもち、検索上でも重要な意味をもってくる。しかしこの見出し語を検索のキーとする場合、次のような問題がでてくる。

まず一つは、見出し語に限ったことではないが、報告書においては、様々な事柄の名称にはすべて当該地域で使用される民俗語彙が用いられる。これは民俗語彙を重んじる民俗学では当然のことであるが、検索にあたっては直ちに不都合が生じることが予想される。全く、もしくはほとんど同様の形態や意味をもった行事が、他の地域では異なった民俗語彙でよばれている場合でも、それらを一括して検索する必要は常に存在すると思われるからである。そのため各地で様々な名称でよばれる同種の行事等に関しては、それらを代表する一般名称を定め、各地の民俗語彙との対応を明らかにしておくことが必要となる。

次にこの見出し語の性格を見てみると、その指し示すものは必ずしも行事名とは限らず、中にはある行事で使用する道具や供物、あるいは単に日付であったりする。従って見出し語が指し示すもののレベルも様々である。高根地区の小正月を例にとればその中にサイノカミ、トリオイ等の行事の名称、１５日につくるダンゴ、ワカモチ等の名称が見出し語としてあらわれる。これらは同レベルのものとは考えにくい。また通過儀礼の産育の場合を例にとれば、高根地区の場合、「４．人の一生と娯楽」の「（１）人の一生」に「（ア）産育」として位置づけられているが、その中の見出し語は最初から順に、妊娠、ハラオビ、安産祈願、妊娠中の禁忌、俗信、トリアゲバアサン等となっている。一見してこの見出し語のレベルあるいは性格が様々であることがみてとれる。また小正月は一般に大正月、正月の準備等を含む正月の中の一つとして位置づけられる。すなわちこれらは正月－小正月－サイノカミという階層構造を形作っている。しかしここで他の独立した行事、たとえば初午、彼岸などと対応させたとき、これらをこの階層のどこへ位置づけて整理したらよいかということが問題となる。更に個々の行事がどの上位の概念に属するかは報告者によって異なることもある。

このデータベースにおいては、主として検索の便をはかるということに重点を置き、見出し語に対して、『日本民俗事典』によりながら[4]、より一般的で共通性をもつと考えられる語を対応させ、更に時期項目、行事の要素という点から分類整理した表（Ｋｅｙｗａｒｄファイル）を作成し、いずれのレベルからも検索が可能なようにした。以下に示すのはそれに手を加えたものである。

時期項目	要素	一般名称	よみがな	見出し語	ヨミガナ	ATﾚｺｰﾄﾞN
小正月	火祭り	左義長	さぎちょう	サイノカミ		AT-031
小正月	火祭り	鳥追い	とりおい	トリオイ		AT-032
小正月		柴迎え	しばむかえ	テシバキリ		AT-033
小正月	予祝	餅花	もちばな	ワタノハナ		
小正月	予祝	餅花	もちばな	ダンゴ		AT-034
小正月	予祝			農具の模型	ノウグノモケイ	AT-034a
小正月	予祝			ガラガラセンベイ		AT-034b
小正月	予祝	粟穂・稗穂	あわぼ・ひえぼ	ホダレ・ホダレヒキ		AT-034c
小正月	予祝	繭玉	まゆだま	マユダマ		AT-034d
小正月	予祝	粟穂・稗穂	あわぼ・ひえぼ	アワボ		AT-034e
小正月	予祝	餅花	もちばな	春袋	ハルブクロ	AT-034f
小正月	予祝	餅花	もちはな	アーボ		
小正月	予祝	粟穂・稗穂	あわぼ・ひえぼ	トクダワラ		

しかし今後、民俗資料のデータベース化に本格的にとりくむためには、民俗語彙全般にわたる整理が必要になってくるであろうことは、以上に述べたことからも明らかであろう。

すなわち民俗資料データベース構築、そして利用の際の基本的なトウールとして、民俗語彙を整理し、それら相互の関係と一般名称との対応を示した、シソーラスのような語彙集を作っておく必要があるのではなかろうか。民族学博物館では早くから民族学研究の発展に資するために、シソーラス作りを基礎とする情報検索システムを構築することが提言され、「シソーラス研究会」が組織されて、その開発について調査・研究が行われた。しかし多様な領域を含む民族学において、すべてをカバーするシソーラスを作成することは難しいこともあって、ひとまずＨＲＡＦ（Human Relations Area Files, Inc.）の『Outline of Cultulal Materials』（文化項目分類：以下ＯＣＭ）の翻訳を行い、その成果を基礎として民族学全般にわたる日本語シソーラス構築の作業を進めることになった。そしてこの翻訳は１９８８年、同館より刊行された[5)]。ＯＣＭは「人間行動や、それに関連する現象のあらゆる側面を包括する主題分類体系の手引書」とされた人間の文化全体にわたる分類表で、「第一に、あらゆる社会集団の文化に関する資料を注解し、分類して、研究者が利用できるようにすること、第二には、調査者が、それぞれ自分に関心のある資料をＨＲＡＦファイルの中で手軽に探し出すことができるようにすること」を目的として考案されたという。すなわち一つには資料を整理・組織化する際の指針として、一つには検索のためのトウールとしてということである。地球上すべての文化を研究対象とする民族学においては、ある「文化に特有な分類体系を採用すると」、利用者は利用のためには「前もってそれぞれの文化に特有の構造を学習しておかなければなら」なくなるため、「文化の普遍的な型」と呼ばれるものを作り出す必要があったが、日本民俗学においては、いずれは世界的な文脈の中でその体系を位置づけることが必要となるにしても、現状ではかえって日本民俗学独自の体系にそった形で、上記のようなトウールの構築を考えられることが求められよう。

前述のように民俗学では頭初から民俗語彙を重視し、それを研究の重要な手がかりとしてきた。そうした研究姿勢の最大の成果の一つが一連の分類民俗語彙１２冊であろう。これは産育、婚姻、葬送、禁忌、服装、歳時などにわたり、関連の資料を各地方の民俗語彙を指標として整理していった語彙集で、昭和１０年から約１０年の間に刊行された。たとえば昭和１４年に刊行された『歳時習俗語彙』では[6)]、各地の年中行事関係の民俗語彙が、「節日総称」、「大小の正月」、「年神棚」などの項目のもとに分類されて列挙され、各々の語彙について関連の民俗事象が記されている。この各々の語彙集をもとにして、様々な民俗事象についての民俗語彙の再整理を行い、シソーラスもしくはそれに類する分類語彙集を構築することは、民俗資料のデータベース化に多大の便宜を与えるのみならず、民俗学の研究自体についても寄与するところが大きいのではなかろうか。実際先述のように報告書の形ですでに膨大な資料が蓄積されているにもかかわらず、それらを検索するためのトウールは、インデックス程度のものでも今にいたるまで検討もなされていない。研究の手がかりとして、語彙を重んじるといいながら、個々の報告書においてさえ索引のついているものはごくまれである。シソーラス構築へ向けての語彙の再整理はこのような状況を見直すきっかけともなるであろう。

しかし実際に分類習俗語彙をもとに民俗語彙の整理をすすめていくにあたっては、先にみた見出し語の整理の問題点を考えてみただけでも、それが容易なことでないことは直ちに予想されるであろう。現在小正月と盆についてこの作業を進めてみているが、小正月を

例にとってみると、『歳時習俗語彙』では「１８花正月」、「１９物作りと皐月祝」の前半とは、いわゆる小正月の作りものにかかわる語彙がおさめられている。これらの語彙について、「桐」を利用して次のような表を作り、分類を試みている。

時期項目	要素	項目１	項目２	項目３	民俗語彙
小正月	＊	＊	＊	＊	ハナショウガツ，ハナカキビ，ホダレセック
小正月	予祝	＊	＊	＊	モノツクリ
小正月	予祝	作り物	＊	＊	ヨロヅモノツクリ，オサクダテ
小正月	予祝	作り物	削りかけ	＊	ケヅリバナ，キバナ，ホダレナ，カイダレ，グンダレ，ツバウゲ，オホンダレ，ウダラシンメイ，カドホダレ，ハナホダラ
小正月	予祝	作り物	削りかけ	粟穂・稗穂	アハボヒエボ
小正月	予祝	作り物	餅，だんご	＊	ハナカザリ，ナリワイギ，ナシダンゴ，オジロノダンゴ
小正月	予祝	作り物	餅，だんご	繭玉	ボクダンゴ，マユダンゴ
小正月	予祝	作り物	餅，だんご	餅花	イネノハナ，ナリモチ，ゴクチ，イナボノモチ，ハナモチノキ，コメノホ，メヲサシ，モチキ

この表では横の方向には一応上下の階層関係がある。最初の列は時期項目、次の列は要素にあたるが、一見してもこの上下関係はあくまで便宜的なものにすぎないことは明らかである。従って他の行事について同じような整理を行った場合、区分原理も道具や供物の機能であったり、材料であったり、表現するものであったり一貫していない。それは個々の行事の性格に依存してしまう。またアワボヒエボは一般的には削りかけであるが、習俗語彙にはアワボノモチなど餅でこれを作る例も見える。この例のようにどこに分類してよいか必ずしも明確でないものも多く、処理にまようもの、あういは中間的な性格をもったものも少なくない。そして更にここにあげたような作りもの相互には、その名称の由来、供えるところ、最終的な処分の方法等により様々な関係が存在するが、この相互関係はかなり錯綜しており、それらの関係をどのように表現し、検索に役だたせていくかが大きな問題となる。小正月のところにおいたホダレセック、削かけのホダレナ、オホンダレ、ウダラシンメイなどは語源的に関連があることは形からも明確であるが、文字列の上から検索することは難しい。何らかの形でこれらの関係を示しておく必要があろう。また研究上からいえば、小正月の作りものは盆の作りものとの関係が考慮に入れられなければならない。このような民俗語彙相互の関係については、やはり「桐」上に別の表を作成して整理をすすめている。

もちろんこれらすべての関係を表現することは必要なく、それらはデータベースそのものの問題であるが、語彙の整理にあたっても、できるだけこれらを生かすような工夫をするべきであることはもちろん、少なくとも整理を一貫したものとするためには、それらの関係をどう扱うかは明確にしておかなくてなるまい。

３．報告書の記述

年中行事情報ファイルを作成している時に問題となったもう一つの点は、記述の内容にかかわる点であった。一つにはそこに記述されている行事が、いつの時点で見られたものかという点が必ずしも明らかではないことで、これを明確にすることは重要であるにもかかわらず、現在も実際に行われているのか、伝承者が過去に体験したものなのか、あるいは伝承者自身伝え聞いたことなのかも区別されていることはあまりない。ここでは報告書

の文章から、これらが判断できるものについてのみ、注意書をそえることとして一応の解決策としたが、この処理が危険なものであることは否めない。次に報告書では行事の記述において、どのようなことを行うかということと、それはなぜ行うかといういわれがいっしょに混在しているが、前者は外部からの観察が可能な現象面での行事の実修記録で、後者は外部からは観察できない現地の人々の意味づけあるいは解釈であり、情報としてははっきり区別されなければならない。これらを区別しなければならないのは、たとえば結婚した当事者と仲人では現象面では同じ行為をしていても、その意味づけは同じであるとは限らないことと、個々の体験は社会・文化的背景によって特徴づけられるので、直接体験したものか、伝聞によるものか、現在もそうであるのか、個別に検討する必要があるためである[7]。報告書の記述様式は、その作成時点の学界あるいは研究者の問題意識を反映するので、それらと対応させる作業を行って、報告自体のもつ制約をまず明らかにしておくことが生産的であろう。ここに述べた問題点もまさにそこから生じてくるからである。

4．その他の民俗資料のデータベース化

これまで主として年中行事資料のデータベース化において問題となった点について論じてきた。それらの点は、民俗学の他の分野の資料をデータベース化する際においても問題となるであろうことは論をまたないが、先述のように民俗資料はそれらの分野によってかなり性格、形態を異にする。ここでは年中行事と比較的近い分野として通過儀礼の産育の場合をとりあげて、年中行事の場合と比較ながら、データベース化の際の問題点に簡単にふれてみることにする。

通過儀礼としての産育の内容をなすものも基本的には一連の儀式であり、この点では年中行事と大差なく取り扱える場合が多い。年中行事情報ファイルとの比較でいえば、時期項目、要素にかわって産育固有の分類を入れ、日付に関しては、生後何日などという時期に変わり、主催者、参加者は関係者として、その役割をはっきり表示することが必要となることがあげられよう。更に儀礼一つ一つには俗信を伴うことが多いため、これをどう組み込むかに工夫が必要であること、年中行事と同じように見出し語によって導かれた項目を一レコードとすると、儀礼とは直接関係のないある人物（トリアゲバアサンなど）や俗信・禁忌のみについての記述もあるため、これらをどう扱うかは大きな問題となる。

おわりに

パソコンおよびパソコンソフトの普及は人文系研究者のコンピュータ利用に大きく道をひらいた。情報処理の分野における技術の進歩は、われわれ人文系の研究者に次々に有用な道具を提供してくれている。先回の研究会において星野氏が紹介されたものは、人文系のある分野の研究者が専用に使えるような道具を提供し、あわせてパソコンの有効利用の可能性を示されたものであった[8]。これらに対してはわれわれも積極的に、それらの道具を研究のためにどう使いこなし役立てていけるかという試み、すなわちそれらをどのように使って資料を整理し、また分析していくことができるかという問題を、今後大いにとりあげていく必要があろう。このような試みがなされてこそ、人文系研究者の側からの情報

処理研究者、技術者への要求も明確化して、真に生産的な両者の協力がなされ、また博物館、研究所で試みられている研究者支援のための大型のデータベースと、研究者の個人のファイルとの有機的な関係も生まれ、そのような施設の研究センターとしての役割もより明確になってくるのではあるまいか。また民俗学資料のデータベース化は、民俗学研究者にとっても新たな研究の展望をひらくであろう。将来年中行事ばかりでなく他の分野のデータベースが完成された暁には、同じ語彙が全く別の文脈で使用されていることが容易に発見できるようになり、そこから新たな問いかけをすることが可能となる。実は民俗学における重要な発見はこのようなことからなされてきた例が多い。すなわちそうした発見の有効性を新たに検証してみる可能性も生まれる。更にブック型パソコンの登場などにより、フィールドにおいて直接調査資料を入力できるようになれば、いままではカード化という制限から注目してこなかった面、あるいは切り捨ててきた面も取り扱えるようになり、資料のとらえ方自体新しい見方が生まれてくることも期待される。このような方向を切りひらくためにも、ここに紹介したような研究者の側からの様々な試みを続けていく必要があろう。

注

１）データベース検索の手引き．国立歴史民俗博物館，１９９０．

２）朝日村文化財報告　第２集　朝日村の民俗．新潟県朝日村教育委員会，１９７７．

３）袖ヶ浦民俗文化財調査報告書　１　昭和地区．千葉県袖ヶ浦町教育委員会，１９８７．

４）大塚民俗学会編．日本民俗事典．東京，弘文堂，１９７２．

５）国立民族学博物館訳．文化項目分類．国立民族学博物館，１９８８．

６）柳田国男編．歳時習俗語彙．東京，国書刊行会，１９７５（復刻）．

７）古家信平．体験の民俗．長野県民俗の会会報，１３，１９９０．

６）星野聰．歴史学研究支援システムの開発．情報処理学会研究報告，８９－ＣＨ－２，１９９０．